

そのとき、自分はまた素直に頷けるだろうか。その現実を、きちんと受け入れられるだろうか。

「何、考えてる？」

「臨也さんのことを考えてます」

抱きしめる強さは変わらないまま、臨也が尋ねる。それに答えると、そう、と彼が笑ったのがわかった。それだけで、この上なく幸福な気分になる。

（僕って結構、お手軽だったんだな）

恋は新たな自分を発見する。それはたいてい、長所ではなく短所ばかりだ。それでも、この恋を手放せない。

「……臨也さんが、好きです」

告げる言葉は、ひどく切実なそれになった。今はそれだけが自分にとって真実のすべてだと、自らに思い知らせるような、その声音。もはや苦笑すらもできない。

「知ってるよ」

答える声はこの上なく、優しく甘い。そうして自分を束縛する腕は、ますます力強くなる。

それが苦しいのに、ひどく心地良い。全身の力を抜き、縋るように身を委ねる。

唇を求められる予感が出て、帝人は躊躇わず、そっと目を閉じた。

触れる唇の感触は、更なる幸福を実感させる。応えつつ、心の片隅で思った。

恋人ごっこは、期間限定だった。けれど。

（今回は、無期限だったら良いのに）

それを告げることはなく、祈るように、——ただ、切実に思った。

E
N
D